

英語学習における効果的な意識および行動要因の検証

－アンケート調査に基づく考察(1)－

菊地大輔

(1) はじめに

本研究は、英語学習の進捗に影響を与え得る要素を見出すことを目的としている。物事を習得する営みの成果には様々な要素が影響を与えている。英語の習得に関してもしかりであり、多数の要素が関与している。そのような要素の中でも、英語の習得に正の効果を与えるものを抽出することが効率的な英語学習を実現するために重要であると考えられる。この目的を達成するには様々な方法が考えられるが、英語の習得に成功した人々を通じて、影響を持つ要素を探ることもその1つである。本研究に先立って、非常に高い英語運用能力を身に付けた日本人の英語力に関する研究も存在する¹⁾。これらの研究の対象とする日本人が生きた時代は、現代とは大きく異なるので、研究対象である達人の生きた時代には存在しなかった学習法や、英語の学習に好ましい影響を与える要素も発見されている可能性があると考えられる。本研究は、この点を踏まえ、現代の視点で英語の習得に成功した良き学習者が備えている要素を見出すことを目的としている。

(2) 調査研究

(2-1) 被験者

後に詳述するように、被験者から得たアンケート結果を基に本研究を行なった。被験者の内訳は、総数 100 名で、年齢は 18 歳から 42 歳である。被験者の学歴は、大学生、または大学あるいは短期大学の卒業生である。後述の基準に基づいて被験者を上位クラスと非上位クラスへと分類した。上位クラスに属する被験者は 11 名であり、一方、非上位クラスに属する被験者は 89 名である。

(2-2) 研究方法

上に述べたように、英語の習得に成功した人が共通して併せ持つ要素を抽出することが本研究の大きな目的である。この目的を達成する具体的な手法にも様々なものが該当し得る。筆者は、それらの中から、人々にアンケートに回答してもらい、その結果を分析する方法を採用した。アンケートであれば、時間の制約の中で多くの回答が期待できることなどがその理由である。さらに、アンケートの具体的な回答形式は、問いの内容に回答者が該当する程度を選択する形式とした。回答者の回答に対する心理的負担が少なく、多数の回答を得られると考えられるからである。自由記述式も考えられるが、本研究では採用していない。その負担の大きさから回答を得られない問いが生じることが予想され、分析するのに十分な量の結果を得られないことを避けるためである。

アンケートの具体的な項目は、以下に述べる理由に基づいて決定した。まず、TOEIC915 点の筆者自身をある程度は英語の習得に成功した学習者とみなした。そして、筆者が経た学習過程を振り返り、心理的側面や、意識的または無意識的に実行した様々な学習方略について問うことを主眼とした。これらの要素には、英語の学習促進に役立ったもの、筆者が役立つと信じていたが実際はそうではなかったものが含まれている。そこで、筆者のこれまでの英語学習の経緯を詳細に振り返って、筆者に程度の差こそあれ当てはまる内容を列挙し、各項目を質問内容とした。後に示す全質問項目のうち、殆どは筆者に少なくとも一部は当てはまるものであるが、筆者が殆どあるいは全く実践していないが、世間で推奨されている内容も含まれている。

上述のように、本研究の目的は、英語の習得が平均的学習者よりも進んでいる人の共通の特徴を浮かび上がらせることである。そこで、アンケートの回答者は、高い英語運用能力を有する人であることが本義であることが当然である。しかし、同時に、このような回答者の回答結果のみでは、この回答者群の中での傾向は観察できるが、果たしてそれがその他のグループに属する回答者の回答と差があるのか否かまでは分からない。そこで、英語力の高い人たちに加えて、そこまで英語運用能力を高めていない人たちにも回答を依頼した。

ここで、英語運用能力の高い人を定義する必要がある。そこで、アンケートには、回答者が取得している英語の資格についての記述欄を設けた。具体的には、合格した英検の級数や、TOEIC や

TOEFL の点数である。英検とは、財団法人日本英語検定協会が主催する英語の「読む」「聞く」「書く」+「話す」力を総合的に認定する検定である。TOEIC とは、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が主催する英語を母語としない者を対象に英語によるコミュニケーション能力を検定するための試験である。TOEFL とは、アメリカ合衆国の ETS (Educational Testing Service) が主催する英語の技能試験である。そして、これらの資格に基づいて回答者を高い英語運用能力を備えたグループと、それ以外のグループとに分けた。前者のグループを上位クラス、後者のグループを非上位クラスと称することにする。回答者の中から上位クラスに属する人を選別する基準は、便宜上、TOEIC スコア 730 点以上の取得者、または英検準 1 級合格者、またはそれに準ずる人とした。これらの資格試験は英語の運用能力全体の限定された側面のみを評価する指標ではあるのだが、資格試験は評価が客観的であることや、これらの基準が、主催者が提示する所与の点数や級を保持する人の実力についての記述に基づいて決定した。英検準 1 級合格者は、協会によると、社会生活で求められる英語を十分理解し、また使用することができるレベルとされている。TOEIC スコアの 730 以上の取得者は、主催団体によると、どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えているレベルに属する。なお、予め、英語を母語とする国で特に低年齢時に長期間に亘って滞在した経験を持つ人は回答者から外した。いわゆるバイリンガルとなる環境において自然に英語を習得した人を調査対象から外すことが目的である。

以下に、質問項目と回答結果を示す。回答方法としては、各質問に対して、(1)全く当てはまらない、(2)あまり当てはまらない、(3)どちらともいえない、(4)やや当てはまる、(5)非常に良く当てはまる、のいずれかを選択してもらった。なお、現在英語学習中の回答者には、自分が現在当てはまるかまたは過去に当てはまっていたかどうかの観点で、また、現在英語学習中でない回答者には自分が過去に当てはまっていたかどうかの観点で回答してもらった。

アンケートには、100 人の被験者からの回答を得た。結果の集計は、各クラスにおいて、質問ごとに全回答者数に対する各回答者の割合を百分率で算出した。上位クラスと非上位クラスとで回答者の数が異なり、また、回答者が回答していない質問もあったからである。集計結果は、以下の通りである。なお、割合を算出した際に、小数点以下を切り捨てたため、1 つの質問に対する各回答の割合を合計しても必ずしも 100%にはなっていない。

なお、アンケート内容は全部で 86 項目から成るが、本論文においては前半の 43 項目についてその結果を示し、考察を行う。残りの 43 項目については稿を改めて述べることとする。

		上位クラス					非上位クラス				
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1	英語が好きである	0	0	28	14	57	17	18	18	26	19
2	英語の学習が好きである	0	28	28	14	28	21	19	25	29	4
3	英語ができるようになりたいと強く望んでいる	0	14	0	14	71	3	6	13	26	49
4	英語は得意である	0	14	28	42	14	29	23	36	8	2
5	好きな英語の先生がいる	14	42	14	14	14	12	12	33	20	20
6	嫌いな英語の先生がいる	28	14	14	28	14	31	10	38	10	8
7	英語を母語とする国に憧れを持っている	14	0	28	14	42	17	11	31	21	17
8	英語を習得する目的がある	0	0	0	14	85	16	19	23	26	13
9	学校の英語の授業に積極的に取り組む	0	14	28	14	28	13	17	38	24	5
10	学校の英語授業や試験勉強以外に自主的に英語を学習する	0	0	0	57	42	31	22	23	20	2
11	英語の語句、文法項目を暗記するのは得意である	14	28	28	28	0	27	24	31	10	5
12	中学、高校の英語の授業は理解できた	0	14	28	42	14	13	15	26	31	12

13	英語学習のライバル(負けたくないと思う相手)がいる	42	14	28	0	14		56	11	24	1	5
14	英語でコミュニケーションを取りたい相手がいる	0	28	14	14	42		36	13	23	16	9
15	英単語は、日本語の意味だけを覚える	85	14	0	0	0		18	23	35	13	8
16	英単語の意味は、日本語で1つだけ覚える	85	14	0	0	0		21	33	26	15	3
17	英単語はCDやテープ等を利用して発音とともに覚える	0	28	14	14	42		32	26	23	11	5
18	英単語のつづりを書いて覚える	14	14	28	28	14		13	9	19	30	26
19	覚えた英単語をすぐに実際に使ってみようとする	14	28	14	14	28		26	22	29	18	3
20	英語の授業中の英単語の発音練習の際はしっかり声に出す	28	28	14	14	14		20	20	30	22	6
21	英単語は、その品詞とともに覚える	28	14	0	42	14		23	23	27	17	7
22	英和辞書や和英辞書を良く引く	0	14	0	14	71		11	16	20	26	24
23	英単語の意味を覚えた後で、その単語を含む文を読むことで単語の意味や用法を確認する	14	0	0	14	71		19	20	37	16	6
24	英単語は日本語を介さずにイメージで覚える	0	14	28	28	28		21	32	21	16	7
25	ある英単語と、この英単語とともに使われやすい英単語を一緒に覚える	0	0	28	57	14		21	25	34	13	5
26	英英辞典を使う	0	14	0	57	28		58	15	11	6	7
27	英単語は、訳語にこだわらずに、それが持つ英語での意味を掴むよう工夫する	0	0	42	42	14		26	17	37	13	4
28	英単語力増強に力を注ぐ	0	28	28	28	14		20	18	31	21	7
29	英単語を覚える際、声を出したり頭の中でつぶやいたりする	0	0	14	42	42		8	15	17	38	20
30	英語の教科書や学習書の文章を覚える	28	28	14	28	0		16	23	40	16	3
31	英文を音読する	0	42	28	14	14		19	17	29	26	7
32	典型的な英文法項目を含んだ短文を暗記する	28	42	0	28	0		19	21	36	20	2
33	英語に毎日触れる	0	0	0	28	71		29	16	29	19	6
34	英語の資格試験合格あるいは高得点を目指して学習する	14	42	0	28	14		23	16	30	25	4
35	持てる時間の大半を費やすほどに集中的に英語学習に取り組んだ時期がある	28	28	14	14	14		28	16	23	17	14
36	英語の学習法に注意を向け、色々な勉強法を試す	0	42	28	14	14		28	18	32	17	3
37	英単語や英文法項目を理解や暗記する際、学校が教えたり教科書に載っていたりする説明とは違って自分なりの方法を創出する	0	42	28	14	14		16	26	38	13	6
38	英文法を重視している	14	14	42	28	0		15	19	35	22	6
39	良い英語学習教材に出会った	14	14	42	14	14		25	25	29	12	6
40	自分に合った効果的な英語学習法に出会った	0	42	0	28	28		31	22	30	9	5
41	一度覚えた英語語句、英文法項目を時間を置きながら繰り返す	0	42	0	42	14		22	26	22	22	5
42	現在の自分の英語力を自ら観察して苦手な部分を埋める学習法を行なう	14	42	0	28	14		29	20	34	11	3
43	現在の自分の英語力に合わせて学習法を適宜変える	14	14	14	42	14		25	26	32	14	2

(2-3) アンケートの結果と分析

具体的な英語学習の方略の採用の傾向が、上位クラス、非上位クラスでどのようになるかを明らかにする前に、心理的側面についての観察を行ないたい。英語に限らず、多くの物事には、その習得を左右する要素には幾つかの側面がある。その中の1つが心理的側面である。習得を目指す対象や、その対象の周囲の物事や人物に肯定的感情を持つか、否定的感情を持つかは、この対象の習得の成否に何らかの形で関与する。そこで、まず、英語の学習にまつわる様々な事柄に対する学習者の内面を明かす質問項目を用意した。

(2-3-1)

問1は、学習者に、英語が好きか否かを尋ねる質問である。

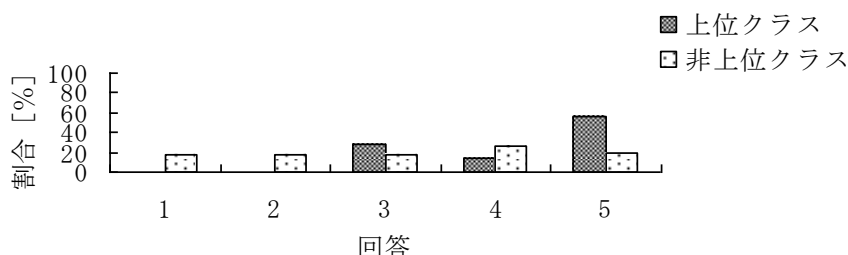


図1： 問1「英語が好き」の回答結果

非上位クラスでは、1または2と回答した否定的回答者の割合は回答者全体の約3分の1に及ぶが、それでも、上位クラス、非上位クラスともに、4または5と回答した人を合わせた肯定的回答者の割合が否定的回答者の割合よりも優勢である。

問1の結果から、英語そのものには、肯定的感情を持っている人が、英語のできる、できないに関わらず多いことが観察される。非上位クラスの結果を見る限り、必ずしも英語に否定的感情を持っていることと英語の実力との間に相関関係はないようであり、また、英語が好きではあるけれども特段英語ができることにつながっていないことから、好きであることと英語の運用能力との間に直接の関係も存在しないようである。

しかし、上位クラスの割合を良く観察すると、肯定的回答者のうちで5と回答した人だけで57%に上り、また否定的回答者の割合は0%である。このことから、さすがに、英語に対して負の感情を抱くよりは強い正の感情を持っていれば、学習の成功に結びつきやすいとは言えそうである。上位クラス、非上位クラスの結果を総合してみると、英語に対して肯定的感情を持っているだけでは英語の習得には不十分であるが、否定的感情を持っているよりは肯定的感情を持っている方が英語の実力向上に有効であり、さらにその程度が強い方が良い結果につながりやすいということになる。

問1から英語が好きであることだけでは英語の実力向上は望めないことが明らかとなった。英語学習の成否を分けるさらなる心理的要素は何かを見るための問いが問2である。問2は、英語の学習が好きか否かを尋ねる質問である。

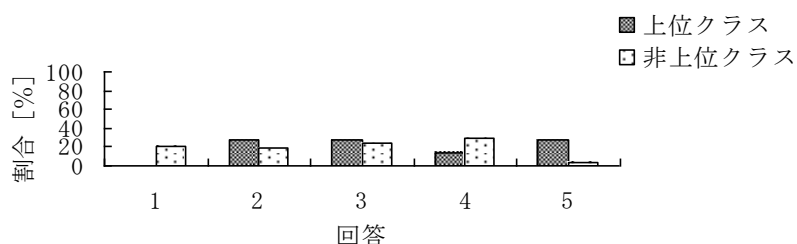


図2： 問2「英語学習が好き」の回答結果

問1のように英語に対する肯定的感情の有無よりも、英語の学習に対する肯定的感情の有無の方が、英語学習の成功により大きく関与するとの予想に基づいている。結果を見ると、非上位クラスでは、否定的回答者の割合が40%と高いが、肯定的回答者の割合が低いわけではなく、33%ある。また、上位クラスでは、肯定的回答者の割合は42%である。肯定的回答者の割合同士を比べてみると、上位クラスの方が非上位クラスよりも際立って高いとはいえない。「好きこそものの上手なれ」ということわざが示すように、英語の実力のある人が英語を好きであることが予想されるが、今回の結果は予想通りの結果を示していない。さらに、非上位クラスで肯定的回答者が33%存在するという結果は、英語の学習が好きであっても、必ずしも英語の実力向上に結びつかないことも示している。この結果からも、英語の学習の好き嫌いは英語の学習の成功に直接的には結びつかないようである。

物事の習得に影響すると考えられる心理的要素には、問1（英語が好き）、問2（英語学習が好き）のような感情に関する要素のほかに、習得を達成する意欲、動機がある。

問3は、英語ができるようになることを強く望んでいるか否かを尋ねる質問である。

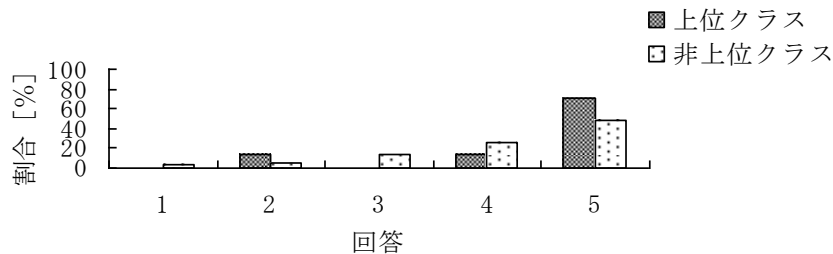


図3： 問3「英語習得への強い希求」の回答結果

この問いは、特に強い理由も無くどちらかといえば英語ができるようになればなりたいといった漠然とした憧れのみで肯定的回答をする回答者が出ることを排除する意図で、「強く望んでいる」という問いかけになっている。それに関わらず、上位では、4または5と回答した人の割合は85%であり、5と回答した人だけでも71%と高い。また、非上位クラスであっても4または5と回答した人の割合は75%と高い。上位クラス、非上位クラスの両方において、英語の習得を強く望んでいる人が大半を占めるという明確な傾向が現われている。両クラスにおいて、英語習得を強く望む人の割合の方が大幅に高い。問1（英語が好き）、問2（英語学習が好き）のように英語や英語学習に対する肯定的感情よりも、英語習得に対する欲求の方が、英語学習の成功に与える影響は大きいと考えられる。上で見たように、上位クラス、非上位クラスの両方で、肯定的回答者の割合は非常に高く、かつ両者に大きな差はない。それに関わらず、2つのクラスの間で英語運用能力に歴然とした差が生じている。このことから、一般論から動機は英語習得の成否に関与する重要な要素であると考えられるが、それだけでは不十分であるといえそうである。別の問いから、英語の学習の成否に影響を与え得る要素を検討する必要がある。

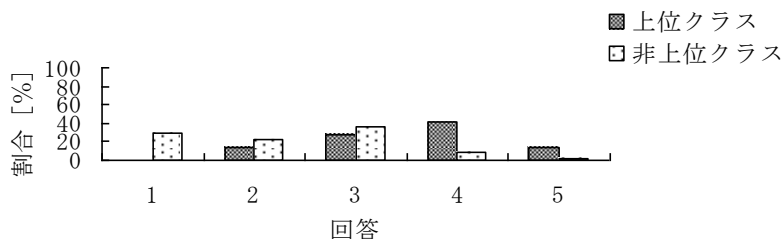


図4： 問4「英語は得意」の回答結果

問 4 は、学習者の自己評価を尋ねている。非上位クラスでは、1 または 2 を合わせた回答者の割合は 52% と過半数である。上位クラスの方では、4 または 5 と回答した人の割合は 56% に上る。上位クラスでは、自身の実力におおむね満足しており、他方、非上位クラスでは、英語ができないと感じている人が過半数である。問 3 の結果が示すように 2 つのクラスの間で英語習得に対する動機づけに大きな差が無いにも関わらず実力に差が生じるのは、動機づけの質の違いによるのかもしれない。動機づけには、代表的なものとして幾つかあり、そのうち、本研究でのアンケート回答者は皆日本で生活しているので、統合的動機づけを持つことは殆ど無いと考えて差し支えないと思われる。

この結果、道具的動機づけと成果的動機づけが残る。統合的動機づけとは、他の言語を話す人々の集団に社会的に文化的に帰属し、その中で自己を確立する手段として第 2 言語を学習するような動機づけである。道具的動機づけとは、社会的地位や教育的素地の向上を目指すための道具として第 2 言語を学習するような動機づけである。成果型動機づけとは、学習結果から得る満足感による動機づけである²。

本問の結果を見ると、上位クラスの肯定的回答者は、おおむね、非上位クラスの人よりも自分の英語の実力に自信を持っていることが明らかである。したがって、少なくとも問 3、問 4 の結果を見る限りでは、上位クラスでは、成果的動機づけが学習者に備わっているといえると考えられる。また、上位クラスの間で、英語の実力が高いにも関わらず、5 の回答者が少ないことから、向上心が高いともいえるかもしれない。

また、教師の好き嫌いによって、物事への意欲や動機づけの変化を通じて物事の習得に影響が少なからず有ることが、脳科学の見地から知られている³。問 5、問 6 は、それぞれ、英語教師に対する好き、嫌いの影響を見ようとするものである。

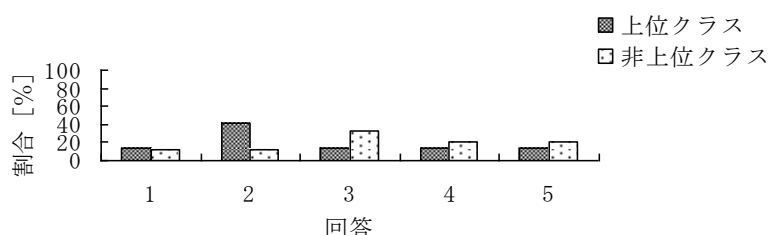


図5： 問5「好きな英語教師有り」の回答結果

問 5 の結果を見ると、両クラスの間で明確な違いは観察されない。いずれのクラスにおいても、各回答が同様の割合を占めており、傾向は観察されない。むしろ、上位クラスで、2 の回答者の割合が高いほどである。

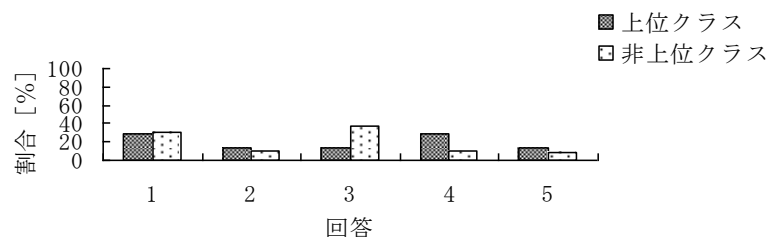


図6： 問6「嫌いな英語教師有り」の回答結果

問 6 の結果も同様であり、各クラスにおいて際立った傾向は認められない。むしろ、上位クラスで、嫌いな教師がいると答えた人の割合が 42% である。問 5、問 6 の結果から、上位クラスの学習者だけが教師に対して好感を持っているといった傾向は観察されない。このため、教師に対する好き嫌いは、英語の実力向上に直接的な影響力を持たないと言えそうである。

問 7 は、英語そのものではなく、英語圏の文化に対する憧れの有無を問うている。

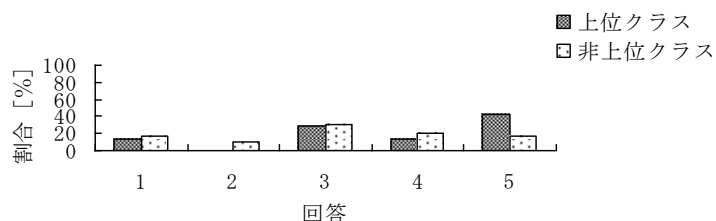


図7: 問7「英語を母語とする国への憧れ」の回答結果

上位クラスの結果を見ると、4または5と答えた人の割合は 56%と過半数を超えており、傾向が認められる。この結果だけを見る限り、英語圏文化に対する憧れは英語習得に有効に働きそうである。しかし、非上位クラスにおいても4または5と答えた人の割合は、38%と低くはなく、肯定的回答者の割合は、2つのクラスで大きな差を生んでいない。この観察から、英語圏の国に対する憧れを持つ程度では、実力向上に寄与しないといえそうである。

問3、問4の結果は、上位クラスの学習者だけが成果的動機づけを備えていることが示している。別の動機づけとして、問8は、道具的動機づけを持っているかを問うている。

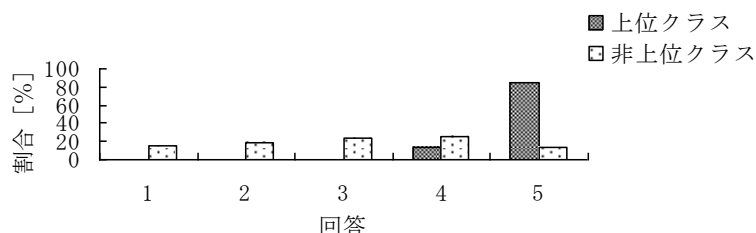


図8: 問8「英語習得目的保有」の回答結果

4または5の回答者の割合は、非上位クラスでは 39%程度であるのに対して、上位クラスでは 100%である。さらに、上位クラスでは5の回答者だけで 85%である。上位クラスでは、全員が英語学習に強い目的意識を持っており、しかも殆どの人の程度が高いという結果になった。上位クラスと非上位クラスとの間の差は極めて大きい。問3の結果と合わせると、上位クラスの学習者は、殆どが英語の習得を強く望むと同時に道具的動機づけを備えていることが明確に現われている。この傾向は、上位クラスに特有であり、かつ顕著である。

一方、非上位クラスの学習者は、上位クラスのように目的意識を持っていない。しかし英語の習得を望んでいるので、非上位クラスの学習者は、英語習得を漠然とは望んではいるが、その理由を意識していない、という様子が浮かび上がっている。そして、目的に対する意識および希求の有無が、上位クラスと非上位クラスとの明確な差であり、これが英語学習の進度に影響していると考えられる。

問14は、英語でコミュニケーションを取りたい相手がいるかどうかを尋ねている。

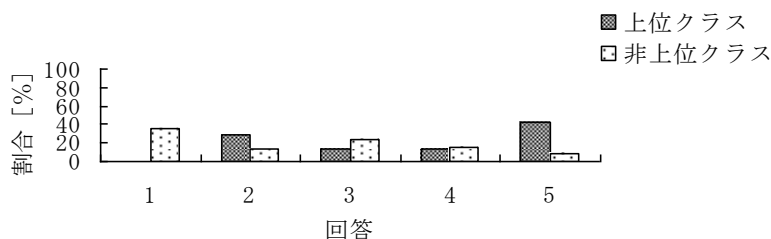


図9: 問14「英語でのコミュニケーション相手有り」の回答結果

英語でコミュニケーションを取りたい相手がいる学習者は道具的動機づけを持つと考えられる。上位クラスでは4または5の回答者が 56%と過半数であり、一方、非上位クラスでは1または2と回答した人の割合が 49%とこちらがほぼ半数である。本問においても、傾向が非常にはっきりとしており、上位クラスでは英語学習の動機を持っている人が過半数であるのに対して、非上位クラスでは持っていない人が約半数である。この傾向は問 8 の結果と一貫しており、問 14 の結果は、上位クラスの学習者のみが明確に道具的動機づけを備えていることを一層支持している。

問 34 は、英語の資格試験での好成績を目指して学習するかを問うている。

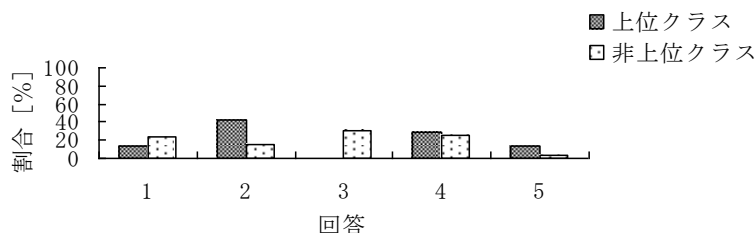


図10： 問34「試験目的の学習」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5と回答した人の割合と、1または2と回答した人の割合がほぼ半々である。非上位クラスでは、5と回答した人の割合が他の回答者の割合より低いことを除いて、分布はほぼ一様である。資格試験での好成績を目指すことは、道具的動機づけに属すると考えられる。

したがって、問 8 を初めとする問いの結果が示すとともに上述したように、上位クラスの学習者の間で道具的動機づけが高いことを考慮すると、本問で4または5と回答する上位クラスの回答者が多いことが予想される。しかしながら、そのような傾向は表れていない。この結果から解釈できることは、資格試験の合格や高得点取得は、上位クラスの学習者の学習を促す最終的な目的ではなく、上位クラスの学習者は、これらを単なる通過点と考えているようだということである。しかし、4または5の回答者の割合を2つのクラスで比較すると、依然、上位クラスの方が非上位クラスよりも高いので、資格試験で高い結果を目指して学習することは、万人に必要とまでは言えなくとも、一定の効果を有すると考えてよいと思われる。

問 13 は、英語学習のライバルの存在の有無を尋ねている。

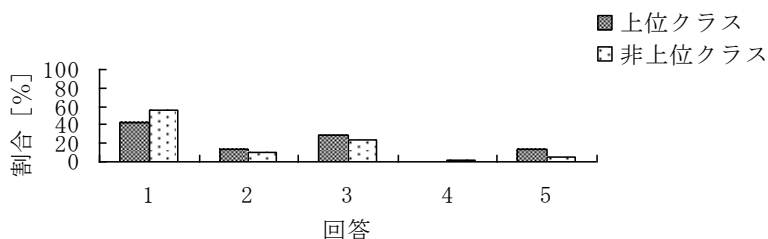


図11： 問13「ライバル有り」の回答結果

結果は、両クラスにおいて、1または2と回答した人の割合が半数を超えており、2つのクラスで割合や傾向の差も認められない。ライバルの存在は、スポーツの領域を初め、どのような分野であれ切磋琢磨を通じて実力の向上につながる人が多いと考えられるが、英語の分野では、少なくとも今回の結果を見る限りでは、ライバルの存在は影響が無いようである。

(2-3-2)

問 9、問 10 は、英語学習の取り組みの姿勢に関する質問であり、問 9 は、学校の授業に積極的に参加するかを問うている。上位クラスでは、4または5の回答者の割合は 42%で、1また

は2を合わせた回答者の割合よりも大幅に高い。このため、上位クラスだけを見ると、学校の授業に積極的に取り組むことが英語の実力向上に有効という結論が得られそうである。しかしながら、非上位クラスの結果を観察すると、4または5の回答者が29%である。この値は、上位クラスの42%と比べて差が顕著であるというには不十分で、したがって、英語授業への積極的取り組みは上位クラスに特有ではない。このため、学校の授業に積極的に参加するか否かは、英語の実力向上にそれほど大きく関与していないようである。

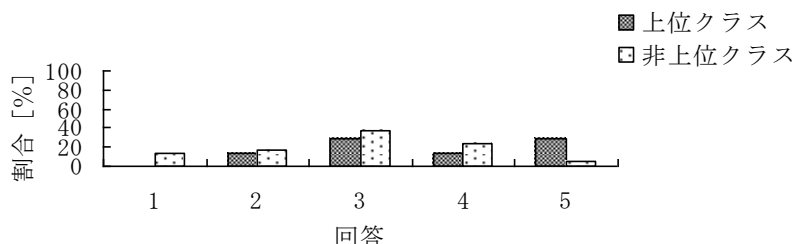


図12： 問9「英語授業への積極的参加」の回答結果

一方、問10は、授業や学校の試験のための勉強以外で学習に取り組むかを尋ねている。

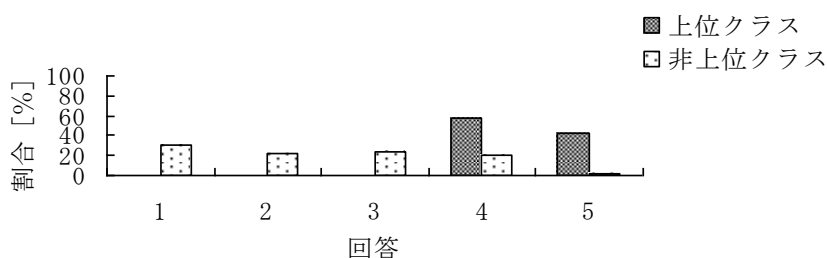


図13： 問10「自主的学習」の回答結果

上位クラスでは、回答者全員が4または5と回答している。一方、非上位クラスでは、1または2と答えた人の割合が53%で多数派である。上位クラスにおいて、全員が自主的に学習しているというはっきりとした結果が表れている。さらに、2つのクラスを比較しても傾向は明確である。つまり、上位クラスでは、全員が授業または試験向け以外の学習に取り組んでおり、非上位クラスでは、そのような学習を行っていない方が多数を占めている。このことから、自主的な学習が重要であるかといえそうである。

問11は、暗記が得意かを尋ねている。

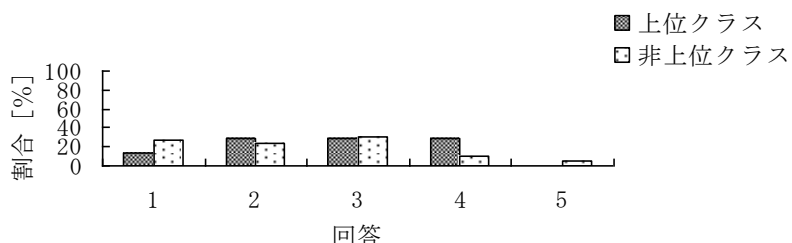


図14： 問11「暗記は得意」の回答結果

結果を見ると、2つのクラスのいずれにおいても傾向は認められず、さらに2つのクラスを比べても回答者の割合の分布に大差はない。上位クラスであっても、あくまで主観的な回答ではあ

るが暗記が得意とは感じておらず、暗記が得意であることと英語の実力との間には相関関係は見られない。むしろ、上位クラスでは、1または2の回答者を合わせた割合が42%であり、4の回答者の割合を上回っている。上位クラスの学習者が、記憶力が弱いと感じながらも高い英語の実力を持っているのは、強い目的意識を持って苦手を克服した結果であるといえそうである。

問12は、学校の授業をよく理解できたかを問うている。

結果は、上位クラスの学習者は56%が4または5と回答している。一方、非上位クラスでは、4または5の回答者の割合は43%である。上位クラスのみを観察してみると、傾向が認められる。しかしながら、非上位クラスでも授業を理解できたと回答している人は決して低くないことから、学校の授業が良く理解できたことは、上位クラスに特有な傾向ではない。このため、授業の理解度が高いことは、英語学習の成功に直接的には関係しないようである。

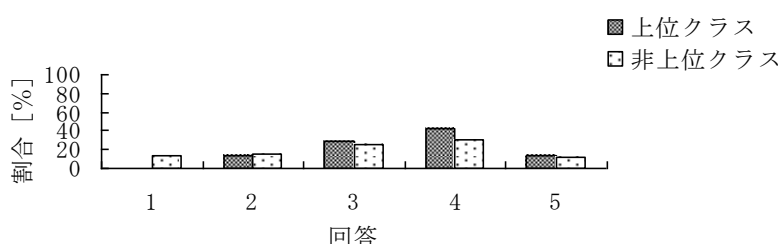


図15： 問12「授業の理解度高」の回答結果

問9から問12の結果を総合すると、以下の結論を導くことが可能である。つまり、上位クラスのみを観察すると、授業に積極的に取り組む人の割合は42%と過半数に達しないが、全員が授業や試験向け以外の学習に取り組んでいる。

また、授業の理解の良否は、両クラスの間で有意な差になって表れていない。ただし、学校の授業が無駄という結論は導き出せず、実際、上位クラスでは学校の授業が理解できたかを問う問12で1と回答した人はいない。これらの結果から、授業に積極的に参加することや、授業を良く理解することは、英語学習の進度の支配的な要因ではなく、英語の実力向上には、学校での活動よりも自主的、自立的に学習するかが鍵であると言えそうである。

また、問9、問10の結果と心理的側面の結果とを総合すると、2つのクラスの傾向の違いが、これらを単独で観察する場合よりも一層はっきりする。つまり、上位クラスの学習者は、英語ができるようになることを強く望むとともに、その目的を明確に意識し、さらに目的達成のために具体的に行動を取っている。願望を持つのみであるとか、目的なしに眼前の学習にのみ取り組むといった、配慮が一方のみに偏った行動ではない、非常に首尾一貫して行動している。英語が嫌いという感情さえも、実際に学習に取り組むことによって乗り越えている。一方、非上位クラスでは、なんとなく英語ができるようにはなりたいが、特段の努力は払っていないという傾向が明らかとなっていると言える。

問1から問8、問13、問14、問34の結果から、道具的動機づけを持っていることが英語の実力向上に好ましい影響を与えているようである。影響が直接的であるのか、間接的であるのかは、ここまでの問いの結果では不明である。動機があるだけでは、学習方略いかんで学習が進むか進まないかが変わり得るからである。上位クラスで多数に支持される普遍的な方略があることや、さらにそのような方略が上位クラスでのみ支持されていることが明らかになれば、このような方略も英語習得に影響を与えていることが分かる。学習方略の使用傾向が上位クラスと非上位クラスで同じであれば、具体的な学習方略によって英語学習の進度は影響されず、動機づけが有効であると結論できるはずである。そこで、以下の問15以降は、具体的な学習方略を採用しているか否かについて関する。

(2-3-3)

問 15 から問 29 は、単語の覚え方に関する特定の方略を用いるかを問うためのものである。

問 17 は、英単語を音声面から暗記するかを尋ねる問いである。

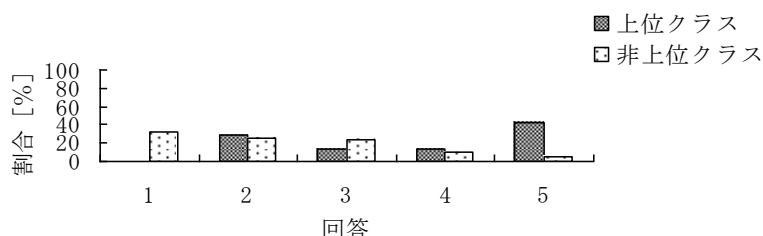


図16： 問17「発音記憶」の回答結果

視覚を通じた記憶は通常行なわれているので、本問の方略を支持する人は、視覚と聴覚の両方による記憶を試みていることになる。結果は、上位クラスでは、4または5と回答した人の割合が 56%と半数以上である。一方、非上位クラスでは、1または2と回答した人の割合が 58%と過半数である。

本問の結果は、傾向を非常にはっきりと示している。つまり、非上位クラスでは、語彙を視覚にのみ頼って記憶しようとする傾向がはっきりと見て取れる。逆に上位クラスの学習者は、半数以上が視覚、聴覚の両方を活用している。学校の授業では、筆者の知る限り、語彙の音声面に対する注意は十分に払われていないようであり、センター試験でリスニングの導入が進んではいるものの、依然、視覚でのみ語彙を認識するための活動に割かれる時間が優勢で、聴覚を介した認識のための活動に十分に時間を割けていないようである。

そうであれば、学習者が音声とともに意味を覚える方略を学校からは教えてもらう可能性は高くないと言えそうである。しかし、上位クラスの学習者は、自主的にそのような方略を脱却し、音声面の知識の習得に励んでいるといえる。

問 20 は、授業中に発音練習に熱心に取り組むかを問うている。

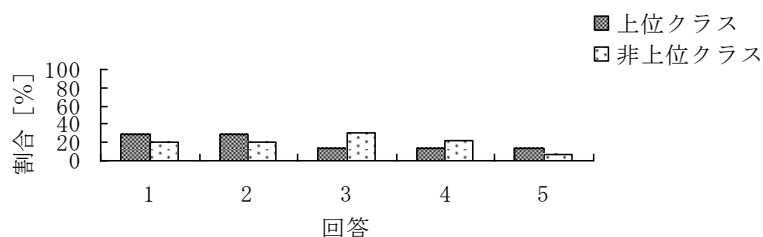


図17： 問20「授業中の発音練習への積極的参加」の回答結果

いずれのクラスにおいても、否定的な意見の方が多数である。上位クラスの学習者は、単語を発音とともに覚える傾向を示す（問 17）が、学校で取り組むかどうかは別の話のようなのである。問 9、問 10 の結果が示す、上位クラス学習者であっても学校の授業に熱心に取り組むとは限らないという結果とも一貫している。

したがって、本問も、問 9、問 10 の結果とともに、学校の授業での活動は直接的に英語運用能力の向上には影響せず、自主的学習が支配的であるという分析を支持するといえる。

問 21 は、英単語の品詞を覚えるかを尋ねている。我が国の英語学習環境では、大半の学習者が中学校以降に学習を開始している。このような学習者は、一部の第2言語獲得分野の研究者によれば、母語獲得時と同程度に言語習得装置にアクセスすることができない⁴。この考え方は、完全に立証されたわけではないが、英語を学習した経験があり、特に客観的には高い運用能力を身につけた人であればあるほど、経験的に正しいことを実感しているといえるのではないかと考

えられる。なぜなら、相当の努力を払ったにも係らず、完全に母語話者のレベルに達することが極稀であるからである。したがって、このような、言語習得装置に頼らずに一般問題解決能力に頼りながら英語の習得を目指す際には、分析的な理解が非常に重要であると考えられる。そのためには、非母語話者は、文法などの母語話者が潜在的に持つ知識を顕在的知識として蓄積することが必要である。そのような知識の1つとして、英単語の品詞が含まれる。

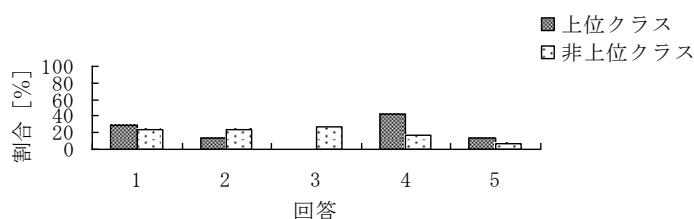


図18： 問21「品詞記憶」の回答結果

上位クラスの結果を見てみると、この考えがある程度は支持されており、4または5と回答する人が56%である。しかし、この割合は、圧倒的というわけではなく、1または2と回答した人の割合も42%である。したがって、単語の品詞を覚える方略は、普遍的に有効とまでは言えない。

問23は、英単語に文の中で触れて意味や用法に注意を払うかを尋ねている。

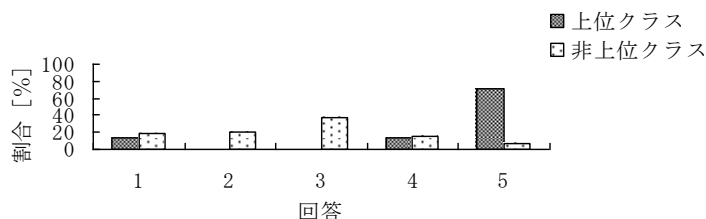


図19： 問23「単語用法確認」の回答結果

結果は、4または5と回答した人の割合は、上位クラスでは85%であり、非上位クラスでは22%と非常に大きな開きが観察される。特に、5と回答した人の割合のみを比較すると、2つのクラスで、71%と6%となり、劇的な差が生じている。上位クラスの学習者は、英語語彙に対応する意味のみを覚えるという方略を取らない傾向が明確に現われている。上位クラスでは、問15、問16と合わせて分析してみると、非上位クラスの学習者が取りがちな英語語彙の和訳を1つ覚えて終わりといった方略を放棄している。上位学習者は、英語表現を立体的・多面的に理解し、記憶しようと努力している様子が分かる。実際の使われ方をも理解・獲得することは、英語の実力向上につながるといえそうである。

問25は、単語をコロケーションとともに記憶するかを尋ねている。

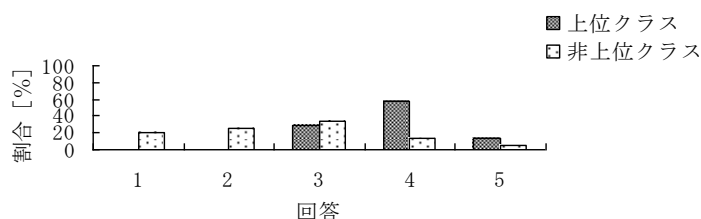


図20： 問25「コロケーション記憶」の回答結果

上位クラスでは、4 または 5 と回答した人の割合が 81%と高く、また、1 または 2 と回答した人は皆無と、明確な傾向が認められる。一方、非上位クラスでは、1 または 2 と回答した人の割合が 46%であり、傾向が認められる。ある日本語の表現を英語で表わす際に、各日本語の単語に対応する英語を繋げたのみでは英語の表現として不適切な場合があるので、コロケーションの知識は、より自然な英語を発信するのに重要である。上位クラスでは、非上位クラスとは対照的に、8 割を超える人がコロケーションとともに英単語を理解しており、上位クラスの学習者のみが立体的な語彙の理解・記憶を目指している傾向を支持する結果となっている。

問 15 は、英単語の意味を覚える際、対応する日本語の意味だけを覚えるかを尋ねている。

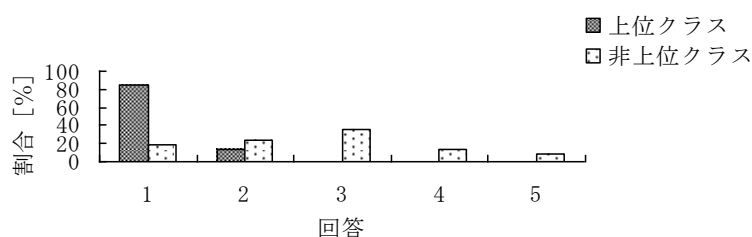


図21： 問15「対応日本語のみで単語記憶」の回答結果

上位クラスでは、全員が 1 または 2 と回答している。一方、非上位クラスでは、4 または 5 と回答している人が 21%存在する。しかし同時に非上位クラスで 1 または 2 と回答した人も低くはなく 41%に上る。上位クラスでは、傾向がはっきりとしていることは間違いない。一方、非上位クラスでは、日本語の意味だけを覚えるような方略を取っている人が多数というわけではなく、むしろ少数派である。

したがって、両クラスにおいて、1 または 2 と回答した人が多数である傾向が認められ、さらに、上位クラスではその傾向が非常にはっきりしていると言える。英単語の意味が、常に 1 つの日本語訳に対応するという事実はない。したがって、英単語の日本語訳を覚えるのみでは、文章の意味を正しく解釈できないことが頻繁に発生する。上位クラスでは、そのような記憶の仕方を全員が避けている。この傾向は非常に顕著であるので、非上位クラスでも似たような傾向を示しているものの、有効な方略といって良いと考えられる。

問 16 は、問 15 と良く似ており、英単語の意味を日本語で、しかも一対一の関係でのみ把握するかを尋ねている。

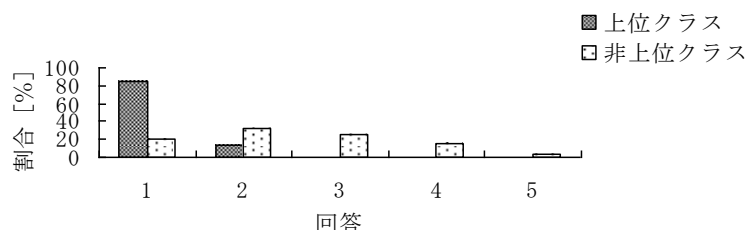


図22： 問16「対応日本語 1 つのみで単語記憶」の回答結果

英単語の対応する日本語訳のみを覚える方法では、多義語、特に様々な意味が派生している基本語や、一見すると関連性がない複数の意味を有する単語を応用することができない。英語と日本語の一対一の対応を覚える方略を支持する人の割合が低ければ、そのような人たちは英単語をより立体的に理解していると考えられる。そのような人たちと英語の実力に関係が見出されれば、英単語と日本語訳を一対一の関係のみで記憶することを避けることが実力向上に有効であると

いえると考えられる。

結果は、問 15 の傾向と全く同じで、上位クラスでは、全員が 1 または 2 と回答しており、非上位クラスでは 4 または 5 の回答者の割合が 18% に対して 1 または 2 と回答した人の割合が 54% と多数派である。上位クラスの傾向は顕著であるが、この傾向は、非上位クラスでも緩やかではあるが観察されるので、上位クラスだけに特有であるとはいえない。しかしながら、問 15 と同じく、上位クラスでの傾向が非常に顕著なものであるので、有効な方略といえそうである。

問 24 は、英単語をイメージで覚えようとするかの問いである。

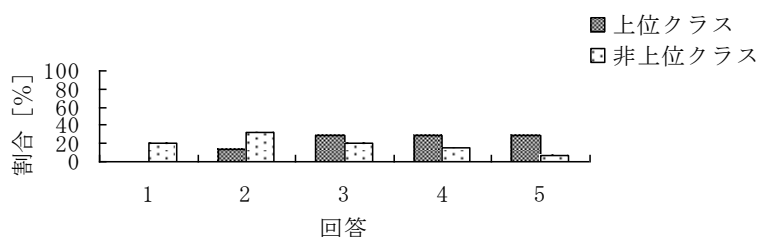


図23： 問24「単語イメージ使用記憶」の回答結果

結果を見てみると、上位クラスでは、4 または 5 の回答者の割合は 56% と過半数である。一方、非上位クラスでは、1 または 2 の回答者の割合が 53% で、こちらが過半数であって、2 つのクラスの傾向は対照的である。単語を日本語を介さずに原義で記憶することは、文章が表わす意味をより正確に理解できることに繋がり、また、自らが使用する際の応用力を高める効果があると考えられ、イメージによる記憶は、これらの効果を得ることにつながる。脳科学の見地によれば、言語を介さずに単語を視覚イメージで記憶することは記憶の定着につながるもので、この点からも本問の方略は有効と考えられる。本問の方略が上位クラスでのみ支持されるという結果は、問 15 (対応日本語のみで単語記憶)、問 16 (対応日本語 1 つのみで単語記憶) の結果とも一貫しており、有効な方略といえる。

問 26 は、英英辞典を使用するかの問いである。

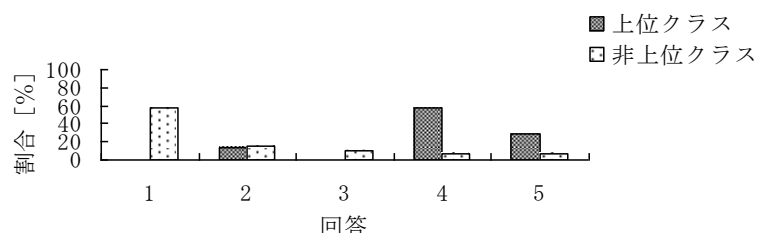


図24： 問26「英英辞典の使用」の回答結果

結果を見ると、上位クラスでは、85% の人が 4 または 5 と回答しており、一方、非上位クラスでは、1 または 2 と回答した人の割合が 73% と非常に高い。

したがって、上位クラスでは非常に多くの人々が英英辞典を使用しており、非上位クラスでは殆どの人々が使用していないという非常に対照的かつ明確な結果となっている。上位クラスの学習者が英語で原義を掴もうとしていることは、英語表現の日本語のみを覚えるだけで満足しない (問 15、問 16) という結果と一貫している。単語の意味の広がりやニュアンスが英語と日本語とで一対一で対応することは稀である。このため、訳語を介さずに直接的に英語表現の持つ意味を獲得することは正しい解釈や応用範囲を広げることにに対して有効であると考えられ、この考えが英語学習の成功に有効であることが支持される結果となっている。

問 27 は、英単語を訳語に頼らずに本来の意味を掴むように努めるかを問うている。

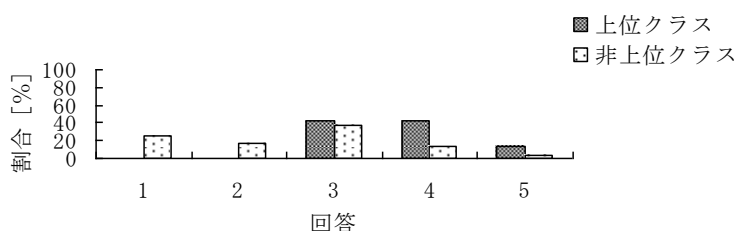


図25： 問27「単語の原義理解」の回答結果

問 27 は、問 15、問 16、問 24、問 26 と関連を持っており、問 27 が問うている目的を達成するための具体的手段が、問 15、問 16、問 24、問 26 に相当する。結果は、上位クラスでは、4 または 5 と回答した人の割合は 56% と過半数であって、1 または 2 と回答した人は皆無である。一方、非上位クラスでは、1 または 2 と回答した人の割合が 43% と多数派である。このように、上位クラスでの過半数の支持とともに非上位クラスでは不支持である。この傾向は、問 15、問 16、問 24、問 26 と一貫している。

問 18 は、英単語のつづりを書いて覚えるかを問うている。

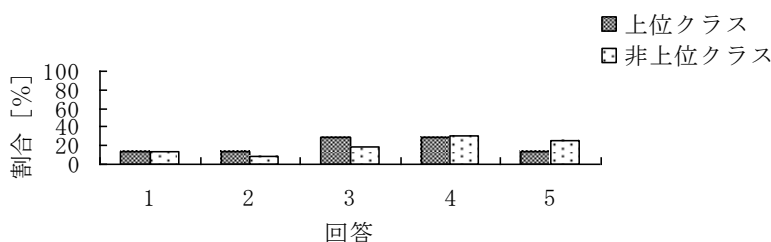


図26： 問18「英単語のつづりを書いて記憶」の回答結果

結果は、いずれのクラスにおいても傾向は全く観察されなかった。したがって、本問の、古典的な方法として広く知られる方略は、英語運用能力の向上に広く有効なものとは言えず、個々人の好みによって選択される手法といえる。

問 19 は、覚えた単語をすぐに使用に結びつけるかを尋ねている。

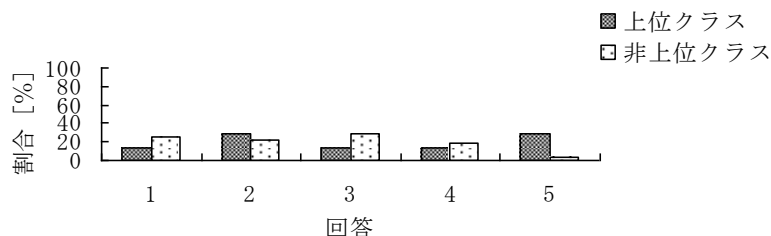


図27： 問19「英単語の学習後即時使用」の回答結果

アウトプット仮説によれば、学習者は、自らの知識を実際に使用し、それを聴いたり見たりした人の反応を通じて、得た知識の自らの理解を修正および再構築する。また、入力した知識を自ら出力することは、知識の定着を促す。したがって、本問のように、覚えた単語をすぐに使用してみることは、第 2 言語習得の見地から有効と考えられる⁶。しかしながら、上位クラスにおいて傾向は観察されない。

問 22 は、英和、和英辞書を頻繁に引くかの問いである。

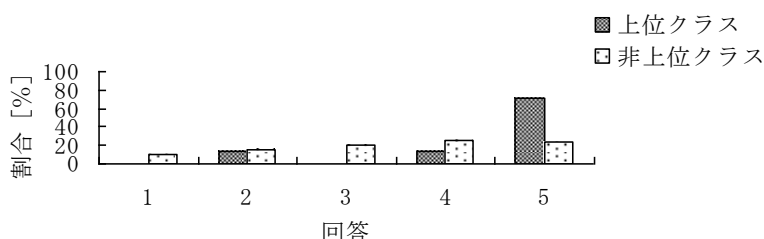


図28： 問22「英和／和英辞書の高頻度使用」の回答結果

結果は、4または5と回答した人の割合は、上位では 85%と非常に高い。しかし、非上位クラスでも 50%と半数に達する。辞書の重要性は、学校を含め至る所で説かれているので、辞書を引くこと自体に上位クラスと非上位クラスとで大きな差はない。英和辞書、和英辞書を引く頻度そのものが英語力の向上に直接影響を与えてはいないようである。ただし、上述のように、英英辞書の使用（問 26）となると、本問の結果とは異なり、英語力向上に対して正の相関を持っている。

問 28 は、単語力強化に努めているかを尋ねている。

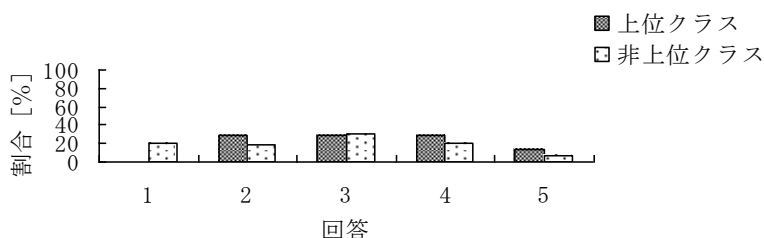


図29： 問28「単語力増強実施」の回答結果

結果は、上位クラスでは1の回答者が皆無であることを除いて回答者の分布は一樣であり、4または5の回答者の割合が 42%と特別に高いわけではない。非上位クラスでも、回答者の分布はほぼ均一であって、特段、肯定的回答者や否定的回答者の割合が高いという傾向は観察されない。したがって、単語量を増やす営みが英語の実力向上に直接つながるわけではないといえる。

ただし、使用可能な単語数は少ないよりは多い方が良いことは言うまでもなく、上位クラスの学習者は相当数の単語の知識を得ていると思われる。その知識が、本問が問うような純粋な単語力増強によってもたらされていないというだけであって、上位クラスの学習者は別の方法で語彙を増やしていると考えられる。

問 29 は、英単語を覚える際に何かしらの形でアウトプットを行なうかを問うている。

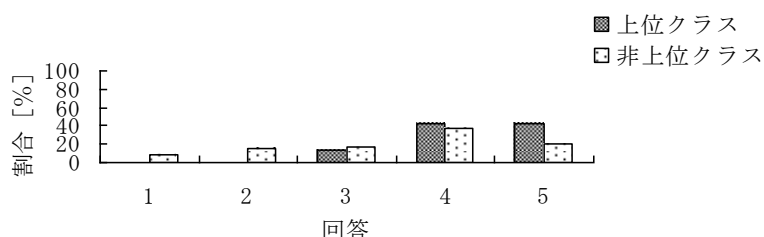


図30： 問29「単語を発音」の回答結果

覚えた知識を出力することは、知識の整理や記憶の定着に有効である。また、器官、特に五感に関する器官を1つだけ用いた活動よりも、複数の器官を用いた活動の方が記憶に残りやすい⁷。これらの観点から、単語を実際に発音してみたり、それができない環境下では口を動かさずに発音している自らのイメージを頭の中で作り上げたりすることは有効である。脳科学の見地からも、ある行為を行なっている状態をイメージすることは、実際にこの行為を行なっているのと同じ訓練効果があることが知られており、有効な行動である⁸。

さらに、英語の理解のみならず、発信ができるようになるためには、本問の方略は不可欠である。本問の結果を見てみると、上位クラスでは、4または5の回答者が84%であって、学習者が、本問の方略を支持している。一方、非上位クラスの方では、4または5の回答者が58%であり、こちらも肯定の回答をした人が過半数である。1または2の回答者も23%ある。

したがって、非上位クラスでは、本問の方略を支持する人は、過半数を少し超えてはいるが、上位クラスほど強くは支持されていないといえる。本問の結果は、問17(単語の発音記憶)の上位クラスでは単語とその発音を結びつけて記憶しようとする姿勢が強いこととも一貫している。上位クラスでは、単なる記憶法の一環として本問の方略を利用しているのではなく、音声面を重視しているといえそうである。

(2-3-4)

問30から問33、問35から問43は、言語運用能力の4つの技能に直接的に働きかける具体的な方略というよりも、これらに対してより広範に影響を与える項目に関する。問30は、教科書や学習書の文章を記憶するかを尋ねている。

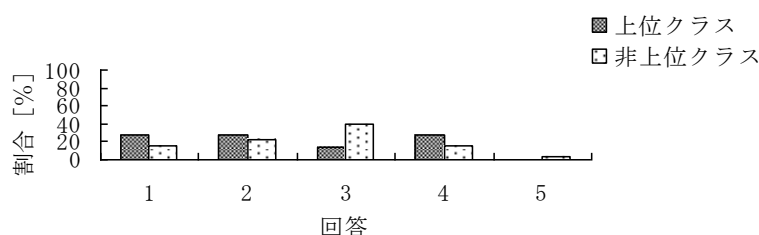


図31： 問30「文章暗記」の回答結果

結果は、いずれのクラスも、目立った傾向は見られない。

文章を丸暗記することの有効性を説く学習法を紹介する本の著者は多い⁹。特に、基本的でかつ応用範囲は広い構造の文を記憶することは、発信の際に有効であると広く言われている。しかし、上位クラスでの回答者の分布が一様であることから、本問の方略は上位クラスで支持されているわけでも上位クラスに特有であるわけでもない。したがって、普遍的に有効な方略とはいえない。

問31は、音読を行なうかを問うている。

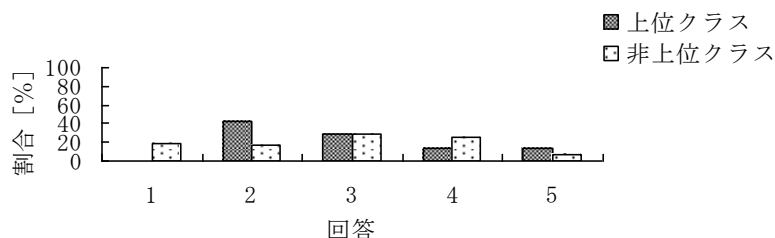


図32： 問31「英文音読」の回答結果

結果を見ると、両クラスにおいて傾向は何ら観察されない。どちらかという、上位クラスに

においても支持されていないほどである。

音読は、1人でできる手軽な発話訓練であること、繰り返すことによって記憶の定着が進むこと等の理由から、その有効性が謳われている¹⁰。しかし、本研究の結果を見る限り一般的ではない様子である。

問32は、典型的な文法項目を含んだ短文を暗記するかを問うている。

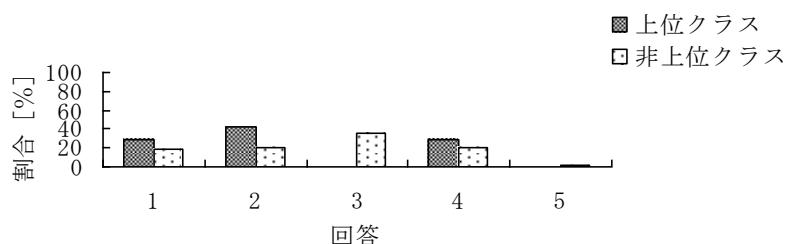


図33： 問32「短文暗記」の回答結果

結果を見てみると、上位クラスでは、1または2と回答した人の割合が70%で大多数であることから、不支持である。なお、非上位クラスでは、回答者の割合の分布はほぼ一様で、傾向は認められない。

問30、問32の結果を合わせてみると、上位クラスの学習者は、文を暗記するという方略を支持しない傾向が見られる。むしろ、そのような方略に対して否定的な立場を取っている方が一般的である。したがって、本研究の結果を見る限り、上位クラスの学習者は文を暗記するという方略に頼らずに英語の実力を向上させているようである。論理的思考や分析能力に頼るところが大きいのかもしれない。

問33は、英語に毎日触れるかを尋ねている。

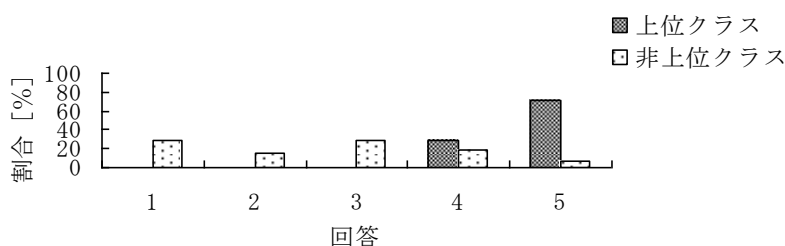


図34： 問33「英語への毎日接触」の回答結果

結果は、上位クラスでは、全員が4または5と回答し、5の回答者の割合だけでも71%と、顕著な傾向が認められる。対照的に、非上位クラスでは4または5の回答者は25%であり、1または2の回答者の割合は45%と半数近い。

英語に毎日触れるということは、多量のインプットの確保や、ある単語や表現に繰り返し遭遇する回数が増えることを通じた記憶の定着の観点から、非常に有効であると考えられる。具体的にどの程度であるかは実証されておらず、また、インプットの質も関与しているはずであるが、ある程度の量のインプットを確保することは言語の獲得に必須である。

また、毎日英語に触れることは、多量のインプットの確保につながる。インプットがどのような原理で第2言語習得につながるかについてはインプット仮説等を含めて第2言語習得研究分野において完全に立証されてはいないが¹¹、少なくとも、インプット量が少ないよりは多い方が良いことは経験的に言えると考えられる。上位クラスの学習者が全員支持する結果からも、本問の方略が有効であることと言えそうである。

問 35 は、極めて集中的に学習に取り組んだ時期があるかの問いである。

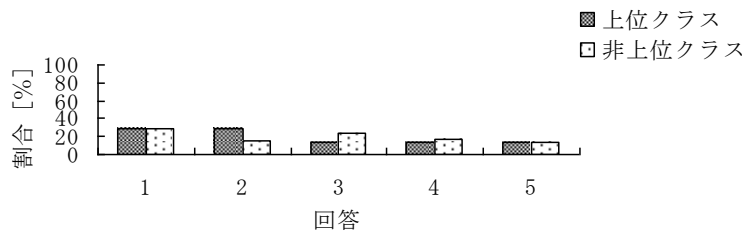


図35： 問35「集中的学習期間有り」の回答結果

結果は、いずれのクラスにおいても、傾向を全く示していない。

問 33 (英語への毎日接触) の結果と合わせて検討してみると、上位クラスの学習者は、短期的に集中して学習するよりも、継続的な学習を支持していることが分かる。このため、英語の上達には、集中的に取り組むことを通じずとも、毎日の学習を通じて上位クラスの学習者の持つ英語の実力まで到達することは可能であると言える。

問 36 は、自らの学習法に注意を向けながら様々な勉強法を試すかを尋ねている。

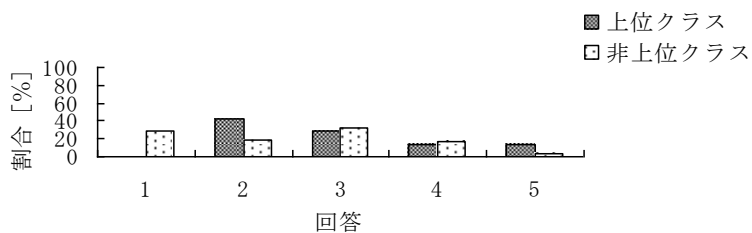


図36： 問36「学習法検討・試行」の回答結果

結果を見ると、上位クラスでは、2の回答者の割合が 42%と最も高い。非上位クラスでは、1 または 2 と答えた回答者が 46%とほぼ半数に達している。したがって、非上位クラスのみでなく、上位クラスでも、様々な学習法を試すといった傾向は現われていない。むしろ、2の回答者が 42%であることから、それほど多くない学習法に継続的に取り組む傾向がある。

問 37 は、自分なりの理解方法や項目の整理方法を作り出すかを問うている。

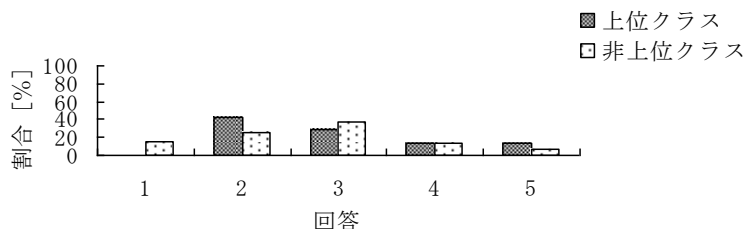


図37： 問37「独自理解法創出」の回答結果

文法書等に記されている法則を鵜呑みにするのではなく自分なりに理解の仕方を整理することは、よりよい理解を通じた広い応用能力や記憶の定着に資すると考えられるが¹²、結果は、上位クラスでは、2の回答者の割合が 42%と最高で、非上位クラスでは、1 または 2 と答えた回答者が 42%と多数派である。したがって、いずれのクラスにおいても、様々な学習法を試すといった傾向は現われていない。

問 38 は、英文法を重視しているかを問うている。

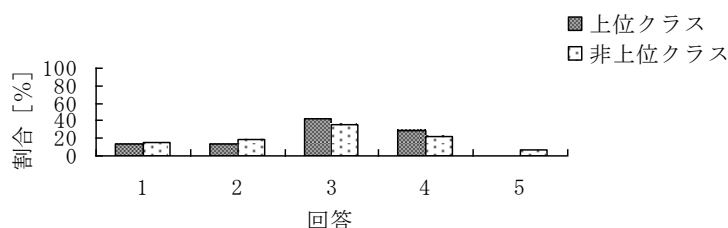


図38： 問38「英文法重視」の回答結果

結果は、いずれのクラスにおいても肯定の回答をした人の割合と否定の回答をした人の割合は殆ど同じである。したがって、傾向は全く観察されない。

問 39 は、良い教材に出会ったかを問うている。

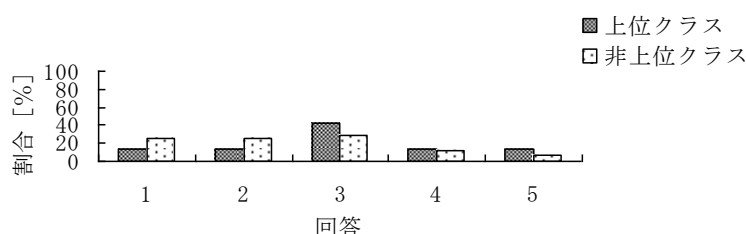


図39： 問39「良い教材に遭遇」の回答結果

上位では傾向は全く観察されず、非上位クラスでは、1または2の回答者の割合が50%で多数派である。非上位クラスで、良い学習教材に出会ったと感じていない人が多数であることは理解できるが、上位クラスでも、1、2、3のいずれかと回答した人の割合が72%と高く、上位クラスの学習者でさえも良い学習教材に出会ったわけではない。そうであるにも係らず、上位クラスの学習者が高い英語運用能力を身につけたということは、教材が実力向上に直接与える影響は大きくなく、その他の要因が影響していると言える。

問 40 は、良い学習法に出会ったかを尋ねている。

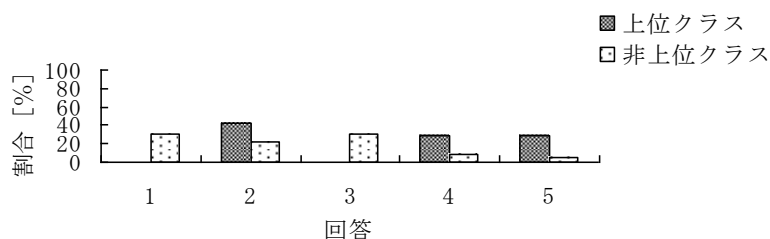


図40： 問40「良い学習法に遭遇」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4または5の回答者が56%である。しかし、一方で、2の回答者も42%と低くはなく、肯定的回答者の割合が否定的回答者より十分に高い傾向が認められるわけではない。非上位クラスでは、1または2の回答者の割合が57%で過半数である。肯定的回答者の割合を2つのクラスの間で比較すると、学習法は影響を持つと言えそうである。しかし、他の問いの結果も合わせて検討して見ると、そのような単純な結論とはならないようである。次に、そのような問42、問43の結果と問40の結果との関連を見る前に、これらの問いの結果を見てみる。

問 42 は、苦手を克服する学習法を自ら見つけるかを問うている。

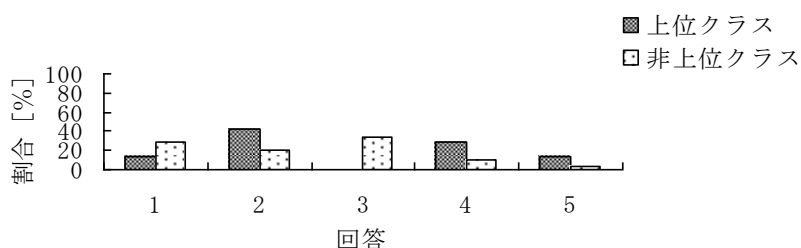


図41： 問42「苦手克服用学習の実践」の回答結果

非上位クラスでは、4 または 5 の回答者の割合は 14% と低い。しかし、上位クラスでも 42% と顕著に高いわけではなく、むしろ上位クラスの 1 または 2 の回答者の割合は 56% と過半数である。問 43 は、現在の自分の段階に合わせて学習法を選択するかを問うている。問 42 と似ているが、本問は、かならずしも苦手の克服を目的としていない点で問 42 と異なる。

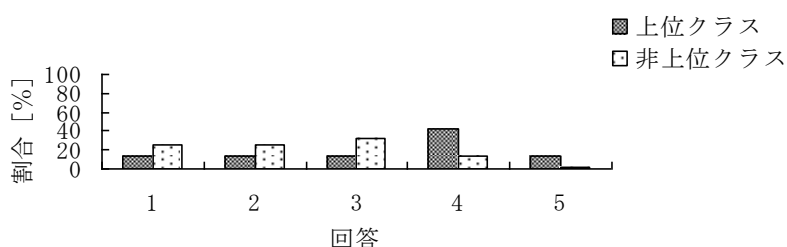


図42： 問43「学習法随時選択」の回答結果

結果は、上位クラスでは、4 または 5 と答えた人の割合が 56% であり、1 または 2 の回答者の割合が 28% と、明確な傾向が表れている。非上位クラスでは、逆に、4 または 5 の回答者の割合が 16% であり、1 または 2 の回答者の割合が 51% と、傾向が観察される。したがって、本問の方略が上位クラスでのみ支持されていることが明らかである。

この結果と問 42 の結果から、上位クラスの学習者は、特に苦手分野の克服といった細かな実力・現状分析に基づいて学習法を選択しているわけではないが、メタ認知を活用して、自らの実力を客観的に観察していることが浮かび上がる。メタ認知とは、認知についての認知であり、メタ認知の活用により、自己の認知活動をモニタリングし、コントロールして、自分自身で効果的な学習活動を演出できる¹³。

上位クラスで観察される傾向は、非上位クラスでは認められない。上位クラスの学習者は、学習法にも注意を払い、しかも 1 つの学習法のみで実力が向上し続けるとは考えずに、常にメタ認知を利用しながら自己を観察して柔軟に学習を進めている様子である。一見すると、問 36 の結果と矛盾するようであるが、そうではない。つまり、1 つの学習法のみ拘泥するようなことはないが、目や耳にした学習法を場当たりの試してみるようなこともないと言ったことが可能である。

一方、非上位クラスの学習者は、このような傾向は全く認められない。問 36、問 42、問 43 のいずれにおいても、概して、否定的回答者の割合が過半数であることから、学習法そのものも注意をそれほど向けていないと言えそうである。そもそも、非上位クラスの学習者は、学校の授業・試験対策以外に英語力獲得のための活動を行っていない (問 10) ので、当然の結果かもしれない。さらに、問 40 の結果も合わせて見てみると、自ら学習法に注意を向けることなく、自分に合った学習法に出会っていないと感じていることから、偶然その魔法のような方法に出会うことを待っているという受身の姿勢が表れているといえるかもしれない。

問 41 は、一度覚えた事項を復習するかを問うている。

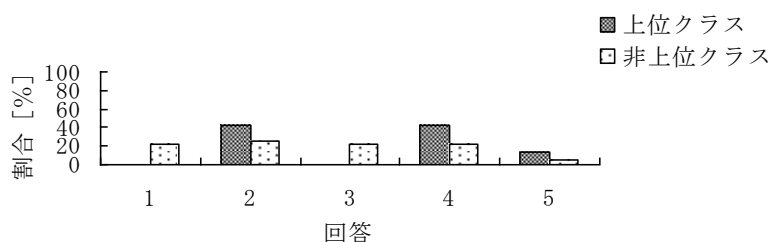


図43： 問41「復習実践」の回答結果

結果は、上位クラスでは、2の回答者の割合も42%と高いが、4または5の回答者の割合が56%と過半数である。一方、非上位クラスでは、4または5の回答者の割合は27%にとどまり、他方、1または2と答えた人の割合が48%とほぼ半数である。上位クラス内で肯定回答と否定回答の割合は十分な差を示してはいないが、少なくとも肯定的回答者の割合が過半数であることから、上位クラスでは支持されているといえると考えられる。この傾向は、非上位クラスでは支持されていないという結果とも対照的で2つのクラス間に明確な差が表れている。学習者が高い記憶力を持っていないと自己評価する点では両クラスにおいて共通である(問 11)が、上位クラスの学習者は、それを補う方略、つまり古典的な繰り返しという手法を用いており、他方、非上位クラスでは対策を取っていないことが明確な違いとして明らかとなっている。

(3) 考察

問 1 から問 8、問 13、問 14、問 34 の結果を俯瞰すると、以下のような全体像が見えてくる。

学習対象や、それにまつわる要素に否定的感情を持つと習得が妨げられることが脳科学の見地から知られている¹⁵⁾。しかしながら、英語や英語教師に対する負の感情を持っていたとしても、上位クラスの学習者のように英語学習が進んでいる人もいる。したがって、英語学習に関する心理的要素のうち、英語そのものや教師に対する感情は、英語習得の進行度には関与しないようである。

そうではなく、英語ができるようになることを強く望む(問 3)とともに、その目的を明確に意識する(問 8、問 14)ことが、学習者を実際の学習活動へと誘導し、その結果、英語の実力が伸びるようである。特に道具的動機づけが強く影響しているようである。実際、上位には、英語がどちらかというと嫌い(問 2)という回答者さえいるのに目的意識によってその感情さえも克服して実力を高めたことが伺える。

以上より、心理的側面については、学習者の動機が学習成功の重要な鍵の1つであると言える。なお、問 34 が示すように、道具的動機づけにより学習者が目指すところは、資格試験に留まらないようである。

問 16 から問 29 までの結果を横断的に観察してみると、以下のような傾向を見て取ることができる。

上位クラスでは、単語を複数の日本語訳や英語の定義を通じて多面的に理解したり、用法や実際の使われ方やコロケーションにも注意を払ったり、音声面の知識獲得や訓練に励んだりすることによって、語彙を立体的に身につけようとしている。一方、非上位クラスでは、問いによっては上位クラスと似たような傾向を示すが、上位クラスほど傾向ははっきりしておらず、また、上位クラスほど多くの面からのアプローチを取っているわけではない。むしろ否定的な傾向を示す問いも少なくない。上位クラスと、非上位クラスとの間で、傾向の違いは明確であり、このため、語彙を多面的に理解、獲得することが英語の実力を向上させる要因の1つといえると考えられる。

問 30 から問 33、問 35 から問 43 までの結果を統合してみると、次の様子が現れている。

物事の習得には、一般に、暗記が有効な役割を果たすと考えられる。この一般論は、第 2 言語習得においても通用すると予想され、教科書や学習書に記載されている典型的な文を暗記することが実力向上に寄与すると説く声も多い¹⁵。しかしながら、上位クラスでは、この方略は支持されていない。暗記に頼らなくとも、上位クラスの水準に達することは可能といえる。また、上位学習者は、学習法に注意を払っており（問 42、問 43）。メタ認知を活用して現状を客観的に観察し、それに合わせて学習法を適宜選択している。その結果として、上位クラスの学習者は自分に合った学習法に出会い（問 40）、それを通じて英語の実力を向上したと考えられる。

非上位クラスでは、学習法そのものに注意を払っていないので、よい学習法に巡り合う確率も低く、実際にそのような学習法に出会ったと考えている人は非常に少ない。また、上位学習者は、それほど強い傾向ではないが、復習も怠らない（問 41）ことも挙げられる。

しかしながら、2つのクラスの中で最もかつ極めて明確な傾向の差を示している問いが、毎日英語に触れるかを問う問 33 である。上位クラスでは全員が毎日触れると答えており、非上位クラスでは、そうでないと答えた人が多数派である。個別具体的な学習法の差よりも、日々の積み重ねと継続性が、英語の実力向上の最も支配的な要因であるといえる。

(4) 今後の課題

本論文では、紙幅の都合から、実際に行ったアンケートの前半部分を素材として考察を行った。今後、残る 43 項目のデータと総合して、主題である英語学習における効果的な意識および行動要因の全体像を明らかにしていきたい。また、過去の先行研究から示唆を得た知見も多数あるが、それらとの個別具体的な比較考察も今後の課題である。

【註】

- 1 江利川春雄(2010), pp.71-90; 安部規子(2010), pp.1-13; 斉藤兆史(2000); 古田紹欽(1993); 大村喜吉(1960); 岡倉一雄(1939)
- 2 大喜多喜夫(2000), pp.94-107
- 3 高島明彦(2006), pp.24-25
- 4 Ibid.
- 5 Ellis, R. (1997 = 2003), pp.128-129
- 6 高島明彦(2006), p.56
- 7 大喜多喜夫(2000), pp.237-239
- 8 池谷裕二(2001), pp.197-208
- 9 高島明彦(2006), p.104
- 10 有子山博美(2008), pp.90-93; 山本大(2007), pp.130-131
- 11 門田修平(2007), pp.176-178
- 12 大喜多喜夫(2000), pp.235-237
- 13 池谷裕二(2001), p.56
- 14 森利昭, 中条和光(2005), pp.158-159
- 15 山本大(2007), pp.130-131

【参考文献】

- ・安部規子「修猷館の英語教育：明治時代の英語教師(2)：夏目漱石の授業参観を受けた3名の教師の履歴について」『有明工業高等専門学校紀要』第46号, 2010年10月, pp.1-13
- ・池谷裕二(2001), 『記憶力を強くする』, 講談社
- ・犬塚博彦「日本語母語話者による英語音声の聴解判断」『岩手大学英語教育論集』第12号, 2010年, pp.46-51

- ・今井光子「日本の大学生における英語学習に対する意欲低下の影響」『東京薬科大学研究紀要』第13号, 2010年, pp.1-7
- ・植田麻実「英語学習における学習意欲喪失(demotivation)の社会的要因」『日本実用英語学会論叢』Vol.15, 2009年9月, pp.21-28
- ・上野輝夫「日本語母国語話者はなぜ TOEFL の得点が低いのか—理由の考察と英語学習法の一提案」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』第12号, 2009年3月, pp.157-166
- ・榮本和子「英語学習における学生の動向」『関東学院大学人間環境研究所所報』第8号, 2009年, pp.43-53
- ・江利川春雄「日本英語教育史研究の課題と展望」『日本教育史研究』第29号, 2010年9月, pp.71-90
- ・Ellis, R. (1997) *Second Language Acquisition*, Oxford, UK: Oxford University Press [牧野高吉(訳)(2003), 『第2言語習得のメカニズム』, 筑摩書房]
- ・門田修平(2007), 『シャドーイングと音読の科学』, コスモピア
- ・Richards, Jack C. & Rodgers, Theodore S. (1986), *Approaches and Methods in Language Teaching*, Cambridge Language Teaching Library
- ・Long, Michael H. (2007), *Problems in SLA*, Lawrence Erlbaum Associates, pp.123-124
- ・大喜多喜夫(2000), 『英語教員のための応用言語学』, 昭和堂
- ・大村喜吉(1960), 『斉藤秀三郎伝—その生涯と業績』, 吾妻書房
- ・岡倉一雄(1939), 『父天心』, 聖文閣
- ・加藤澄恵「英語学習者と動機づけ—内発的動機と外発的動機からの考察」『国際経営・文化研究』Vol.13, No.1, 2008年11月, pp.57-65
- ・金谷憲他(2004), 『和訳先渡し授業の試み』
- ・工藤洋路「英語習熟度別に見る英語学習の実態と英語に対する意識の違い—これからの英語の学習と指導への示唆」ベネッセコーポレーション『研究所報』第56号, 2009年12月, pp.64-72
- ・國弘正雄(1999), 『國弘流英語の話し方』 たちばな出版
- ・黒岩裕「英語習得の新たな枠組み—英語習得=英語学習+英語使用」『青山学院女子短期大学紀要』第63号, 2009年12月, pp.129-141
- ・小磯かをる「英語学習に対する情意形成のメカニズム」『大阪商業大学論集』第5巻第1号, 2009年5月, pp.495-508
- ・小島さつき, 太田聡一「学生の英語聴解能力におけるシャドーイングトレーニングの効果に関する実証的研究」『宮城学院女子大学研究論文集』第110号, 2010年6月, pp.47-62
- ・斉藤兆史(2000), 『英語達人列伝』, 中公新書
- ・酒井志延, 中西千春, 久村研「大学生の英語学習の意識格差についての研究」『リメディアル教育研究』第5巻第1号, 2010年, pp.9-20
- ・佐藤敏子, 中川武, 山名豊美「なぜ学習効果があがらないのか: 学習動機・学習方法と学習効果」『研究紀要』つくば国際大学, 第16号, 2010年, pp.23-39
- ・重迫隆司, 吉田一衛, 三浦省五「英語学習における不安について」『福山大学人間文化学部紀要』第8号, 2008年, pp.55-68
- ・島田雅晴「筑波大学における教養英語教育」『大会 proceedings』(日本英文学会), Vol.82, 2010年5月29日, pp.172-174
- ・下村秀則「英語教育に求められる意識のパラダイム・シフト—英語コンプレックスの克服に向けて」『京都外国語大学研究論叢』Vol.76, 2010年, pp.23-42
- ・白井恭弘(2008), 『外国語学習の科学』, 岩波新書
- ・白井雅裕「国際交流と英語教育—その接点としての TOEIC の指導」『日本私学教育研究所紀要』第46号, 2010年7月, pp.113-116
- ・高島明彦(2006), 『面白いほどよくわかる脳のしくみ』, 日本文芸社

- ・高田桃香「日本人英語学習者の発表語彙力と会話力の相関関係」『Otsuma review』Vol.42, 2009 年 7 月, pp.211-222
- ・竹内理(2000), 『認知的アプローチによる外国語教育』, 松柏社
- ・田崎清忠他(1995), 『現代英語英語教授法総覧』, 大修館書店
- ・Ducker, Nathan「日本の英語教育を改善する為の文化研究」『国際関係研究』Vol.30, No.1, 2009 年 10 月, pp.83-92
- ・村野井仁(2006), 『第 2 言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』, 大修館書店
- ・畠山雄二(2003), 『ことばを科学する』, 鳳書房
- ・林千晶「大学生の英語学習に関する意識調査」『福岡女学院大学紀要 人文学部編』第 19 号, 2009 年 3 月, pp.69-79
- ・福岡賢昌「英語学習に関する意識調査—短大と理系の大学との比較を中心に」『英米文学語学研究会論集』第 13 号, 2009 年, pp.55-88
- ・古田紹欽(1993), 『鈴木大拙—その人とその思想』, 春秋社
- ・三田薫「日本の大人学習者の英語学習環境：大手英会話スクールの元ネイティブ講師の視点から分析する社会人の学習環境」『Jissen English communication』Vol.40, 2010 年 3 月, pp.33-77
- ・三宅滋「日本人英語学習者の復唱における再生率と発話速度の変化の考察」『ことばの科学研究』第 10 巻, 2009 年, pp.51-69
- ・宮崎里司(2001), 『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』, 明治書院
- ・森利昭, 中条和光(2005), 『認知心理学キーワード』, 有斐閣双書
- ・森村久美子「東京大学工学部における英語教育」『工学教育』第 58 巻第 3 号, 2010 年 5 月, pp.65-69
- ・山本大(2007), 『英会話の正体』, 国際語学社
- ・吉田弘子「英語学習における多読の効果—授業に多読活動を導入するために」『大阪経大論集』第 61 巻第 2 号, 2010 年 7 月, pp.133-143